

特集にあたって

真の緩和ケア総合医になるために

企画・構成 平原佐斗司 Hirahara Satoshi

(東京ふれあい医療生活協同組合梶原診療所所長)

非がん疾患の緩和ケアの関心は、この数年で急速に高まりつつある。

在宅ケアの現場にとどまらず、急性期医療の現場や一般病床、施設などあらゆる場で、医師や看護師など多くの専門職が、日々困難な非がん疾患の緩和ケアの課題に直面している。

わが国の非がん疾患の緩和ケアは欧米に10年以上遅れており、2000(平成12)年を過ぎたころから、主に老年や在宅分野から発信され始めた。この数年間で、非がん疾患の緩和ケアに関心が高まったのは、2010(平成22)年以降、循環器、呼吸器、神経内科、腎臓など各専門領域において、終末期の医療やケアのあり方についての提言やガイドラインなどが相次いで発表されたことによるところが大きい。これによって、疾患ベースで非がんの緩和ケアを学ぶ機会は増えてきている。

しかし、実際の臨床では、非がん疾患患者は超高齢者が多いため、一人の患者が複数の疾患と障害をもっており、われわれは複数の病態と障害、苦痛の全体を見渡してマネジメントしなければならない。

疾患にかかわらず、苦痛をもつあらゆる人のニーズに応えられる真の緩和ケア総合医が求められている。

また、在宅にかかわる医師や看護師には、非がん疾患をジェネラルにみるための知識が欠かせない。

そこで、今回の特集は、疾患横断的に、症状別に非がん疾患の緩和ケアについて、時にがんと対比しながら論じるという、今までにないまったく新しい企画とした。

明日からの、在宅での非がん疾患の緩和ケアに役立つことを願っている。